

道標ない旅

～「自立」と「共生」を目指して～ 南郷中学校

令和元年12月24日(地域版第11号)

校長 益田 孝彦 875-9494

◆◆ 1・2年でFGC地域学習を実施しました。◆◆

11月21日・22日には、2学年の職業体験学習、1学年の地域ふれあいの会を実施させて頂きました。これは地域のみなさまのご協力なしでは到底なしえない行事です。ご協力ありがとうございました。

2年生にとっては、初めて働くことを実体験することで、生き方・進路を考えるきっかけを頂いたり、地域の方とのふれあいを通し、地域社会の一員としての自覚を持つことが出来る大きなきっかけを頂きました。この成果については来年の文化祭で報告発表も行われます。ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

地域ふれあいの会では、生徒が考えた疑問や質問に丁寧にお答え頂くなど、町内会・自治会の方々の手厚いご協力を頂き、1学年が地域の良さや課題に気がつく良いきっかけを頂きました。生徒・担当教職員を代表して改めて感謝申し上げます。これらの学習機会は、生徒の成長にとって欠くことの出来ない大切な物です。今後ともご支援よろしくお願い申し上げます。



◆◆ コミュニティスクールの実践を見るため先進校に視察に行ってきました。◆◆

見学してきたのは、平成17年横浜市が初めてコミュニティスクール(CS)第1号として指定した、東山田中学校の運営協議会の様子です。出席されていた委員さんは、学校管理職2名を含む11名の委員(PTA会長・町内会会長・主任児童委員・公民館館長2名・運営協議会会長・地域の弁護士・元校長・地域コーディネーター・校長・副校長)でした。この日のプログラムは、業務員や事務職、生徒指導担当と懇談し、現在抱えている課題を共有することや、学校祭、職業学習、全国学力学習状況調査等の担当者から報告を受けることと、学校が素案を作った市教委への要望を協議することでした。

業務員さんが、雨漏りに苦労していることを聞くと、地域で上手い解決がないか考えたり、事務職が校庭にあるバスケットゴールの処分にお金がかかりすぎることを話すと、切断して小さくすればお金がかからないことを知って、その方法を模索したりと、学校の悩みを自分事のように捉えてアイデアを出し合ってくれます。学校の「応援団」になっている様子がよく伝わってきました。私たち葉山町の他に、浜松市と東京都港区から視察の方が見えていましたが、大変貴重で参考になる視察となりました。



◆◆ 高円宮杯全日本中学校英語弁論大会決勝大会進出の快挙です。◆◆

高円宮杯全日本中学校英語弁論大会は、日本の将来を担う若者たちの英語の上達と国際親善を目的に、1949年に始まりました。65年以上の歴史と伝統を誇る国内最高峰の大会で、第51回以降は高円宮杯として開催されています。出場する中学生は、自分の意見や主張を制限時間5分以内でスピーチします。各都道府県大会を勝ち抜いた生徒は東京で行われる中央大会に進出し、1位には大会名誉総裁の高円宮妃久子さまから賜杯が授与されます。(読売新聞社HPより)

さんは、27日の、東京・神奈川・千葉・埼玉・茨城・栃木・群馬・長野・山梨・静岡の10都県から集まった県大会上位者34人による決勝予選大会において、6名選ばれるファイナリストに選ばれ、全国27人で競う決勝大会に進出しました。29日の決勝大会には、本校から先生・先生・先生も駆けつけ見守る中、さんは堂々とスピーチを行ったそうです。惜しくも入賞者とはなりませんでしたが、素晴らしい経験になったと思います。本校の文化祭での英語科スピーチが、全国トップレベルのものであると分かっただけでも、嬉しくてゾクゾクしてきます。2年生での決勝進出も快挙ですが、来年もまたチャンスがあるので、さんの一層の実力アップを応援したいと思います。

【この大会に参加するため、あなたはどんな準備や課題を克服してきましたか】

今回のスピーチで課題となったのは、5つの日本語だった。本来は全て英語のスピーチなはずだが、私は日本の文化について語ったので、日本語がいくつか入った。元々英語の方がしゃべりやすいのもあって、5分間ずっと英語でしゃべっていると、途中で入ってくる日本語を上手にきれいに発音することができなかった。だから最初の頃は、ひたすら日本語の発音の練習をした。

私は、顔も名前も知らない100人の前でスピーチする方が、知り合い100人の前でスピーチするより緊張せずになしとげることができる。だけれどそんなことは言っていられないので、家に来た友だちに聞いてもらったり、毎日家族に聞いてもらった。実際に言っていないが、寝言で言うほど練習を積み重ね、自分らしさをつらぬき、大会に挑みました。

【この大会に参加することによって、自分にどんな成長があったと思いますか】

- 大勢の人の前で緊張せず、自分を見失わないで、ありのままの自分をつらぬき通すことができた。
- 数少ない2年生の中の1人だったが、学年、地域に関係なくコミュニケーションを取ることができ、旅館に集まった151人、知らない人はいなくなるほどになった。

◆◆ 南郷中学校教育懇話会を開催しました。 ◆◆

12月7日(土)に南郷中学校にて教育懇話会を開催しました。そこで出た話題を紹介しします。生徒会からは、会長の さん副会長の さんが出席。 会長さんからは、2005年度から続く意見箱ですが、その有効な活用を目指して、意見箱に入れられた意見に対しコメントを返すようにし始めた事が報告されました。また 副会長さんからは、12/2に始まった、いい事に気づいたら紙に書くと、それを掲示してくれる「いいこと Box」の取り組みが紹介されました。集まった教育懇話会の大人の方々からは、応援の拍手と頑張っている声援が生徒会の二人を包み込みました。

続いては葉山警察署生活安全課長さんからは、犯罪は65件(昨年度比-11件)ですが、空き巣が3件(+2件)、交通事故は105件(内、児童生徒5件)死亡事故0は継続中。町外在住の青少年で大麻所持が数件あり、薬物関係を警戒している事などが報告されました。

青少年指導員さんからは、さわやか体験学習・竹の子掘り・稚魚放流潮干狩り体験や、ジュニアキャンプ等に取り組んでいる事が報告されました。民生委員さんは、ふだん地域の見守りや、福祉の橋渡し、学校訪問などに取り組んでいる事や、今年度53名の委員の内、20名を越す委員が交代し新しくなった事の報告がありました。

地域の会長さんたちからは、FGC活動を楽しみにしている事、ボランティア清掃も期待している事、生徒を迎え入れる準備の中で自分たちも知らない事を生徒に話している方に出会い大変勉強になった事などお話をいただきました。子供会の継続が難しい実情や町内会の結集の難しさや、逆に若いお母さん方が自治会で活躍しているお話などもありました。

葉山小や長柄小の活動やPTA活動についての紹介もあった中、本校からは学校だけで紹介したことのある、コミュニティスクールについて、見学してきた報告を皆様にお伝えしました。

話題の中には、「バスの無償化を考えてほしい。暗がり自転車等で走る子どもたちがかわいそうだ。」「借り上げバスが出来なくなった。増発バスは対応してくれるのだが、役場方面に行くバスがない。葉山を循環する路線さえあれば解決するのだが。」「南郷中に上がってくる坂道の適切な道路標識が足りない。」「昔よく取られた手法だが、部活動で連帯責任を取る考え方は今もあるのか。」「南郷中学校の文化祭ポスターやプログラムに開催の日付が入っていないのはなぜ?」→「学校ができていた時期に開催日が分かると不都合があったことの名残では。」などなど、活発な意見交換がなされました。

今まで土曜日開催でしたが、次年度以降は平日開催となることも承認されました。

◆◆ 長柄小・南郷中合同避難所運営委員会が、12月8日(日)南郷中にて開催されました。 ◆◆



台風15号・19号は様々な知見を葉山町にもたらしました。特に葉山町全校に避難所運営委員会が立ち上がった今年度、いくつかの解決すべき課題も出てきました。南郷中としての課題を私は以下のように話しました。

「地震の際の避難所と、終わりが見えている大雨洪水土砂災害に対する避難所とは考えを分けて考えたい。南郷中ではペットの受け入れは自転車置き場と考えていたが、台風時その考えは通用しない。校舎に守られた生徒昇降口が今回妥当であった。台風一過学校はすぐに再開されるが、土砂災害で実際に家屋を失った方は、南郷中に長期の避難を余儀なくされる。学校の通常運営と両立できる家屋を失った避難者の避難場所の確保を、教職員同意の下確立しておく必要性を感じた。」

このあとの協議で、「1. ペットの同行避難について」「2. 車両で避難して行く避難者の受け入れについて」「3. 他校避難所で散見されたという体育館内でテントを張ることについて」「風水害での避難所運営について(→風水害については役場主導)」「教室の開放について(→南郷中は考えてあり大丈夫)」「飲酒の可否について(→禁酒を継続に決定)」などを話し合い、1~3については、次回2月4日の避難所運営委員会で決定していくこととなりました。

◆◆ 生徒の成長を見つめる学校の姿勢を再考する ◆◆

基本的には私たち教師集団は、子どもの成長を願い、子どもたちができない点を見つけると、それができるように指導します。多くの子どもたちは、このやり方を通して、自分の弱点を克服し、成長を遂げていってくれます。だからこそ、私たち教師集団も、この接し方(本人の成長を促す)でいいのだと自信を深めていきます。ところが、11月19日教育委員会で開催された、逗葉地区学校保健会 秋の研修会は、目からウロコの講演会でした。今の考え方だけで学校運営してよいのだろうかと思う内容でした。もし今、ご家庭の子育てで、「出来ないことをやらせよう(成長させよう)と何度も試みたけれど、失敗に終わった。ダメなところを責めることが、一向に効かない」といった児童や生徒を抱え、焦燥感に駆られている保護者の方がいらっしやったら、この講演会を聞かれたら、私同様、目からウロコの思いをされたのではと思います。

講師の 先生(津久井浜クリニック、児童精神科医師)は、暴れる二人の事例、引きこもる三人の事例、市販薬依存行為の二人の事例をあげて説明してくださいました。

事例の七人ともそれなりにこじれてしまった複雑な背景を持っていましたが、その背景はどの家庭にもあるような背景にも感じられました。七人を改善に向かわせようと周囲から様々な努力がなされたけれど、結局一向に好転の兆しは見られなかったそうです。

しかし、最終局面での七人の有り様には大きな差が出たそうです。事例の七人の内、四人は事態の好転を迎え、三人が変わらず状況が悪いとのことでした。『大切なはその理由が、「四人は、周りが変わった。三人は、最後まで子どもを変えようとした。」でした。』

『周囲の環境や周囲の関わり方が変われば、大きく前進するケースが多々ある。本人を変えようとしても、なかなか成長が見えづらい。』とのことでした。これは、なかなか変容できない生徒への接し方において、学校の指導にも活かせる考え方のような気がします。皆様はどう思われたでしょうか。